



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	河上肇と唯物史観
Author(s)	岩崎, 允胤
Citation	北海道大學文學部紀要, 11, 39-63
Issue Date	1963-02-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33278
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_PR39-63.pdf



河上肇と唯物史観

岩

崎

允

胤

河上肇と唯物史観

岩 崎 允 胤

「マルクス主義こそが、またそのみが、間違いもなく此の地球上に永遠の平和を齎らすであろうことを、科学的真理として固く信じつつ、半生をこの主義の研究及び流布のために費し來ったことを、自分としては、自己の為しうる最大最上の仕事であったと現在もお確信して動かない……」

河上肇「自画像」『自叙伝』一（第二次世界大戦のさなかに）

一、河上の学問的生涯とわれわれへの遺産

河上肇の長い学問的生涯を貫いてかれ自身を——ついにマルクス主義にまで——導いたものは、真理への情熱であつた。かれは『自叙伝』のなかで「実に徐々に、二十年も三十年もかかつて、一個のマルクス主義者に成長し了えた、私の文筆の遍路の跡」、「二十代の若い頃、極端な唯心主義者として其の文筆の活動を始めた私が、五十過ぎてからやっと徹底的な唯物論者となり得るまで、実に一生涯をかけて漸く完成しえた私の思想的転回の跡」と自分の歩んできた道を述懐している。⁽¹⁾ 東大出の法学士という肩書きをもつ一インテリとして観念論的な世界観と宗教的な絶対的非利己主義とブルジョア

経済学から出発し、やがて帝国大学教授という地位に就きながらマルクス主義の世界観と学問に到達するまでの長い遍歴、そしてさいごに党の戦列に加わり、弾圧によって獄舎に繋がれ瘦軀よく思想的節操を守ったその道程は、紆余曲折、いくたの苦難にみちたものであつた。かれをそこにまで導き、それほどまでにかれを支えたものは、真理へのひたむきな愛であつた……。

かれはたしかにその道程でしばしば見解を変え、批判を受けてはそれに従つた。この側面を皮相的にしか見ないものにとつては——しかもかれがマルクス主義とその党の戦列に加わつたことを苦々しく思うものにとつてはいつそう——、かれが「何らの自主的な性格を持ちあわせない」「いつも何かに影響され、支配され」「ひきずられ」てばかりいる「ヨタヨタした存在」（杉山平助評）としか映らなかつたかもしれない。しかし、こうした批判はかれの人間の本質から距ること遠い、とわたくしは思う。たとえばかれが批判を受けてしばしばそれに服したのは、かれにおよそ自分の考えというものがなかつたからではなく、その批判のなかに真理性の存するのをかれが認めたからである。かれの思想の発展にとつてとくに櫛田民蔵と福本和夫との与えた影響は大きく、もしこれら兩人の批判がなかつたならば、のちの河上肇とその業績もなかつたであろう、と言つて差支えないほどである。批判にたいしいたずらに旧説を墨守することなく、反対にそれを介して学問的前進をつづけたのは、かれが科学的真理の基準は客観性にあることを確信していたからである。

河上の学問的努力の跡を顧みるとき忘れてならないことは、当時の日本におけるマルクス学の水準である。かれが『資本論』を本格的に研究するようになった頃（大正八年『社会問題研究』創刊の頃）のことを、河上はこう言っている。³⁾「私が勉強を始めた頃には、就いて教を請うべき先輩もなく、欧米諸国にもさして立派な本は出ていなかった。『資本論』の手引となる本といえは高島素之の訳したカウツキーの『資本論解説』という小さな不完全な著書があっただけである。だから私は、長い間、文字通り、盲者の牆のぞきを余儀なくされたので、何遍となく間違ったことを書いては取消し、書いては取消していた。……私の書いたものは間違いだらけであった、しかしそれは月をさすための指として役立つ。」しかし、こうした事情はひとり『資本論』研究の場合にのみ存したのではない。唯物史観についても、邦語でまとまったものとしては、『社会問題研究』創刊の翌年、ようやく、ゴルテルの『唯物史観解説』³⁾が邦訳されるといった状態であった。河上の『唯物史観研究』（大正十年）や櫛田の「マルクス学に於ける唯物史観の地位」（大正九年）などの現われたのはこうした水準のなかであった。唯物弁証法にいたっては、福本出でてはじめてその問題の重要性が自覚され、喧しく論議されることとなったのである。こうした事情は、当時の人々の模索がいかに困難をきわめ、しかもいかに真剣なものであったかを物語っている。じつにかれらの努力がわれわれに切々と訴えるのは、今日のようにジャーナリズムと商業主義によってマルクス主義の思想の純粹さが汚されていない当時における真理追究のあのき

びしさである。

河上の模索は当時のわが国におけるマルクス学全体の模索を集中的に表現しているとさえ言えるほどである。それでは、この努力によってかれはどのような成果に達したか。『資本論入門』、『経済学大綱』、『マルクス主義経済学の基礎理論』、『第二貧乏物語』、『マルクス主義批判者の批判』……。しかし、それらのなかでわたくしはやはり『資本論入門』が河上畢生の著作であると思う。これは、『資本論』第一巻の註釈に終ったのは残念だけれども、ローゼンベルグの有名な『資本論註解』と比べて、その詳しさにおいてその深さにおいて、優っているとすら言えると思う。これはかれがわれわれに残した尊い遺産であり、同時に、当時の日本マルクス学が生んだ輝かしい世界的な貢献である。⁴⁾

注

(1) 河上肇「自画像」『自叙伝』、一九六一年、岩波版、一三二頁。

(2) 同上書、一八〇—一頁。

(3) 細川嘉六監修、渡辺義通、塩田庄兵衛編『日本社会主義文献解説』（一九五八年）一一〇—一頁にあるこの書物の解題によれば、「平易な叙述でマルクス主義体系を全面的に解説した点、当時の日本には未だ類書がなく、訳者堺によって、『唯物史観』を取りまとめて解説した書物は、幾らもない。ゴルテルの此の小著は、数年前まで類書中に殆んど唯一の通俗書と目されていた」（新版の序文）とのべられたわけである。そのようなわけで河上肇の緻密なマルクス解釈の展開、高島素之の『資本論』完訳以前の、大正中期のマルクス主義の啓蒙活動が活発になりはじめた頃、マルクス主義の理論家の第一人者、堺、山川らの著述はこの著作の独訳によること大きく、その他の知識人たちもこれによってマルクス主義を知っていた。したがってまた、この翻訳が出版されるや、一般の読者に大いに歓迎されたのであった。」とある。

(4) 河上の他の主著、たとえば『資本主義経済学の史的発展』『経済学大綱』『マルクス主義経済学の基礎理論』などは中国語訳されたが、『資本論入門』は翻訳されていないようである。(天野敬太郎編著『河上肇博士文献志』一九五六年、九八頁「中国訳目録」による。)ローゼンベルグのような評論家を国際的に得ていないのは、ただ言語的条件によるのである。

二、河上の唯物史観研究の発展

——その二期への区分——

経済学者としての河上の特徴は『資本論』をその哲学的基礎から把握しているところにある。しかしさきにも触れたように、曲折した遍路を経てかれはそこに到達したのである。若くしてセリグマンの『歴史の経済的説明』を翻訳し(明治三八年、二七歳)、その後、マルクス主義へ次第に接近してゆくなかで、マルクスの『経済学批判』の序言にあるいわゆる唯物史観の公式を中心に数多くの労作を発表したが、かれは容易にはその哲学的基礎にまで達しえなかった。しかし、福本が弁証法的唯物論と唯物史観を議論の正面に据え、河上を論敵の一人として論陣を張るに及んで、河上は「唯物史観に関する自己清算」と二年間にわたって取り組み、その過程のなかでかれはマルクス主義の哲学的基礎を把握した。『資本論入門』や『マルクス主義経済学の基礎理論』はこの「自己清算」を介してはじめて生まれえた成果である。このようにして弁証法的唯物論、わけても唯物史観はかれの経済学的遺産の基幹となりえたのであり、かれのこの哲学的研究は日本マルクス主義哲学の歴史のなかに立つ一つのすぐれた道標となった。

それゆえ、河上の唯物史観研究の決定的な転期は「自己清算」の執筆(昭和二年、一九二七年、河上四九歳)に始まる。したがって、かれの振幅の長い唯物史観研究の行程は、それを境に二期(仮に、前期・後期と呼ぶ)に区分されうるのである。

しかし、この前期——かれはなお経済史観の見地にとどまっていた——をさらに二期に区分する必要がある。『貧乏物語』のブルジョア経済学的立場を櫛田によってきびしく批判された河上は、マルクス主義とその経済学の研究に本腰をいれる。そして「真理の方向はここにあるという見込をつけ、分からぬなりにマルクス主義を宣伝しようと決心するに至った」⁽¹⁾のが、『社会問題研究』創刊のさいの河上の心境である。この時(大正八年、一九一九年、河上四一歳)をもつて前期は二分されうるのである。この時以後かれはようやく「マルキシストらしい色彩を現わし出し」(逸名筆者)てきたのである。⁽²⁾

(1) 河上肇「自画像」「自叙伝」一、一七八頁。

(2) 古田光「河上肇」(一九五九年)は好著である。しかし、氏によれば「一体、何が河上をしてかかる『非転向』のマルキシストたらしめたのであるか。この間に明確な答を与えることが、今日における河上研究の最大の課題である」(三頁)とされる。そしてこの点の解明が本書の主題となっているが、「非転向」問題に河上研究の焦点を集中するという点では、わたくしは同意見ではない。

三、マルクス主義哲学への「新たなる旅」に旅立つまで

——河上の唯物史観研究の前期——

この時期を通じての特徴は、唯物史観が唯物論的世界観から捉え

られず、経済史観にとどまっているところにある。

その一 セリグマンの翻訳から『社会問題研究』の創刊にいたるまで

セリグマンの『歴史の経済的説明』は、その標題の示すように、歴史の唯物論的な把握ではなしに経済史観を主張すべきであるという見地から書かれており、しかも、社会主義とも何ら共通な主張をもたないことが力説されている。このような根本的な欠陥があるにせよ、マルクスの歴史把握をまとめて取扱ったものとしてはわが国でおそらく最初の文献が青年河上によって『新史観』と題して訳出されたことは注目される。⁽¹⁾

当時の河上は、多分に国家主義的な傾向からブルジョア経済学の研究をするとともに、空想的社会主義、さらに極端に唯心論的な無我愛の思想をも抱いていた。かれの中央論壇へのデビュー作『社会主義評論』（明治三十八年一〇—十二月『読売新聞』連載）では、社会主義をば「経済上に於ける不平等の救済を目的とする」ものとし、「之が研究は苟も世務に志あるものの一日も閑却し難き問題」としながら、「刻下に施すべき現在の政策としては……社会主義の主張は用う可らず」と断じ、「我利我執に迷盲せる人々の無明を一変して純無愛、純他愛の樂境に逍遙せしめ、然る後始めて社会主義の実行期し得べし」と述べ、まず人心の改造の必要を主張し、「新社会の美所」を空想描写している。⁽²⁾

かれは伊藤証信の無我苑の門を敲いたがやがて失望し、⁽³⁾ ふたたび経済学の研究に帰った（明治四十一年には京大に赴任）。その後——『貧乏物語』の執筆に及ぶ——におけるかれの研究の基礎的立場を述べたものとして特筆すべきは「唯物観より唯心観へ」（『経済学研究』には「唯物史観の立脚点」と改題して収録）と「経済的唯物史観を論ず」とである。さて「唯物史観の立脚点」によれば、唯物史観は人類社会の現象を自然科学的に観察するものである。⁽⁴⁾ ところで、自然科学的な観察の仕方というのは、いっさいの事物について「外部の或る立脚地よりして其の表面の外形様相を観察し知得する」のであって「其の内部に入り之が中心より其の内実の真景實在を直観し會得する」のではない。「故に唯物史観の世界には、只だ人間の外相あるのみ、其の内幕に至っては全く之を見ることが能わず。」これにたいし「吾人が實在を知り絶對を知るは、科学以外の学に於いて始めて可能なり。而して一切の目的、一切の理想は、此の科学以外に超然たる真個の心学より進み出す。」ということになる。

すなわち、人間とその行為について、物質的・因果的・機械的・法則的な見方と意識的・価値的・目的的・表現的な見方とを対置し、かれ自身は「唯心論的に自我を観じ、唯物論的に外物を観じつつある」者であつて、科学者としては「唯物史観を標榜して立つ者」ではあるが、「科学的智識を以て實在に関する絶對最高の智識なりと信仰せる哲学上の唯物論者」の「仲間」に属せず」というわけである。これは全く二元論であり、ゆえに「Marx oder Kant にあらず sowohl Marx als Kant ならざる可らず」と河上は書いてゐる。

しかも注意すべきは、かれが科学的・唯物論的ということを経験的・機械的と理解している点である。「物体は本来静止の状態に在

るもの」でその「運動の原因は必ず之を物体の外に求めざるべからずと考へらる。……是の故に科学の世界は因果の世界なり。」したがって「苟くも科学的に人間の行為を見れば、それは純然たる物体の運動に外ならずして、其の一切の行為は皆な因果関係の連鎖より成る者と謂うべく」云々ということになる。それゆえ、ここ（人間の社会）には進化も発展もない。「唯物史観に云う所の社会の進化は、実は変化にして進化に非ず。」——このようにして、唯物史観は、人間の行為の外相についてのまったく機械論的な考察として捉えられている。

「経済的唯物史観を論ず」では、右の「立脚点」に立つて、いわゆる唯物史観の公式の解説が試みられているが、わたくしはただ、河上がマルクスの史観を「単に唯物史観と云うよりも寧ろ経済的史観又は経済的唯物史観と云うべきもの」（つまり「社会に一定の変動の起る原因に就いての学説」としていること、また——物質にたいし意識を優位におく立場から——「経済的唯物史観は、少くとも論理的に云わば人類の進行と共に次第に適用の度を減ずるものである。」）（なぜなら「人類の意識なるものは次第に発達するものであるから」とみていること——依然としてセリグマンの見地に あること——を指摘するにとどめる。）

一年余りの外遊から帰った河上は、大正五年四月に「奢侈と貧困」を発表、同年九月以降『大阪朝日新聞』に『貧乏物語』を連載している。前者には後者の骨子が述べられており、これはいちはやく有名な櫛田の批判を呼びおこした。河上によれば、貧乏の原因は

奢侈にあるがゆえに、貧乏退治の第一案は奢侈廃止——社会改造でなく人心改造——でなければならぬ、つまり、社会問題は分配問題ではなく生産問題だとされている。⁸⁾これにたいし櫛田は、河上の所論は所得分配の不平等な社会を前提したうえで立てられており、社会問題は生産問題ではなく分配問題であることを主張する。櫛田はそして「社会問題解決の一法として教授は何故に労働者階級の自覚（経済的自覚）を希望せられない乎。」と問うている。⁹⁾

『「貧乏物語」と『社会問題研究』との間の二年間は、博士の思想の動揺期転換期であつた。¹⁰⁾かれのこれまでの学問的精進の基礎が吹きすさぶ嵐のなかで支えなく揺れているようにかれに思えた。重苦しい産褥の床のなかでかれはついにマルクсистへと自己を転生する。『社会問題研究』創刊の直前におけるかれの思想を述べている「労働運動の使命」¹¹⁾では、社会問題の根本的解決法は労働者の解放であり、この解放の任に当るべきものは労働者自身の団結であるという見解に到達している。

その二 『社会問題研究』の創刊から「自己清算」の執筆開始まで

『社会問題研究』は、大学教授の地位を利用して社会主義を宣伝するために刊行した河上の個人雑誌で、大正八年一月から昭和五年一〇月まで一〇六冊を数え、マルクス主義の普及に大きな貢献をした。¹²⁾そればかりか、社会主義者として第一歩を踏み出したかれは、この雑誌とともに成長した。「講壇にある学究の立場からマルクス主義を信奉し、その解明普及に全力を注いだ河上の出現によって、わが国における精緻なマルクス主義研究の伝統は、ここにはじめて

確立したのである。⁽¹³⁾

しかし、唯物史観はなおしばらく哲学ぬきの経済史観として捉えられていた。この頃の代表作『唯物史観研究』(大正十年)でも、かれは、前述の「経済的唯物史観を論ず」の論点——経済的社会変遷観の見地——を再認している。⁽¹⁴⁾ こうした欠陥のために、かれは、福本の論文「唯物史観の構成過程」(大正一四年)で「我が河上博士に於ては……弁証法といい唯物論というが如きことはついに一顧だにも値いしていないのである」という批判を浴び、ついで福本の「河上博士の唯物史観より分離せざるべからず」(大正一五年)という論文を呼びおこす結果となったのである。⁽¹⁵⁾

さて、『近世経済思想史論』(大正九年)では唯物史観についてのかかなり詳しい解説が与えられているが、——さきに「唯物史観の立脚点」では社会には進化、発展はなくてはならないとされてきたのになし——歴史の変動が当然のことながら「進化」「発展」とも呼ばれているということのほかに、ここでわたくしがとくに言及しておきたいのは、唯物史観およびその階級闘争との関係についての河上の見解と、それを批判するなかで榎田が到達した見解である。河上によれば、「唯物史観と資本論と社会民主主義」は「マルクス主義の三大原理」であるが、「此等三大原理の根本を縫うて一本の金の糸の如くに走る所のもは、所謂階級争闘説である。」しかも「かの唯物史観なるものは、人類の組織せる社会の形態が、外囲の物質という無意識的の力の為に、如何なる影響を受けるものなるかと云う事を、自然科学的に觀察して立言せしもの」である

が、階級争闘説は、このような外囲の影響を受けつつある人類社会の中に経済的階級の区別を生ずるときには、階級的の感情と思想、階級争闘を生むに至る、という主張であり、「階級争闘説は唯物史観の一要素と云うよりも、全く過去の歴史に対する一適用と見做すべきである。」⁽¹⁶⁾ 河上のこの見解にたいする榎田の批判は、要するに、唯物史観の特徴は、「それが、社会変動の原因を物質的条件殊に生産力の発展に求めたと云うばかりでなく、その変動の形相を矛盾の発展として(弁証法的に)見ると云うことにある」⁽¹⁷⁾、かの三大原理の根本を縫うて金の糸の如く走るものは、「階級争闘説と云うよりはむしろ弁証法的な事物の見方」であり、階級争闘説は「このマルクス特有の弁証法の見方の一つの表現であり、しかも唯物史観そのものの結論」ではなからうか、というところにある。⁽¹⁸⁾ 唯物史観を、社会形態が外囲の物質から受ける影響についての自然科学的觀察とみる河上にたいし、これを社会変動の弁証法的な把握としてつかんだ点で、榎田はずっと進んでいる。そればかりか、榎田は論文「マルクス学に於ける唯物史観の地位」のなかで「マルクス学の神髄は唯物史観であり、之れ無しには、マルクスの他の凡ての学説は成立しない」という命題に達している。そしてかれはいわゆる唯物史観の公式を分析してそれを「貫通するものは、物質的条件の認識と弁証法的研究方法とであり」、「この故に、唯物史観を以て弁証法的唯物論と呼ぶのは、此の史観に対する他の凡ての名称よりも、最も名実相副うものの如く考えられる。」とも述べている。⁽¹⁹⁾ ここには唯物史観と弁証法的唯物論との混同があるし、弁証法の把握も深いも

のではなく、さらに、弁証法的唯物論がはたして世界観として捉えられているかどうかも疑問であるが、櫛田が原理的な把握において河上よりも先んじていることは、いづれにせよ確かである。

さて、『唯物史観研究』は「自己清算」以前における河上の唯物史観にかんする代表作である。この書物が出版される頃のわが国のマルクス学の水準については第一節に述べたとおりである。当時これを捉えていた主要な観点を瞥見するために、今それに収録された論稿を見ると、全巻が上篇研究、下篇翻譯の二部分から成るなかで、上篇には、

『経済学批判』の序文に現われた唯物史観の公式
唯物史観公式中の一句について

唯物史観に所謂『生産』『生産力』『生産関係』の意義

唯物史観と必然論

『共産宣言』に見われた唯物史観の応用

『資本』に見われた唯物史観の断片

唯物史観の要領

の諸論文が含まれており、下篇には、

史的唯物論（唯物史観）略解（ボルハルト）

唯物史観と宿命論と個人の努力（ブーディン）

唯物史観と因果律と精神生活（グンテル）

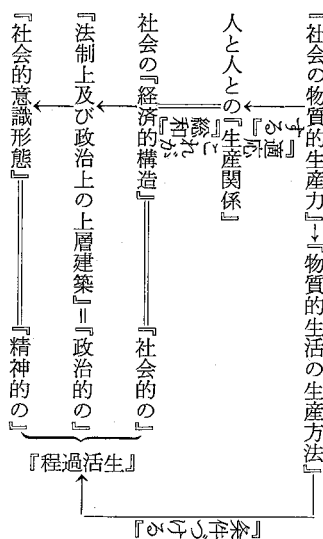
唯物史観と實際的理想主義（シュタウディンガー）

唯物史観と科学的社會主義（エンゲルス）

の諸訳が含まれている。

この書物には、さきに指摘したように、唯物史観を哲学ぬきの經濟史観とみる見地が貫いているほか、「一定の社會組織が生産力の發展を束縛するに至るとき、その社會組織は必然に打破せらるべきである、とマルクスが主張するのは、畢竟するに、彼が人間の生きんとする意志を動かすべからざる前提とするからである」というように、唯物史観の根本に *Wille zum Leben* をおいている点や、——歴史の原動力は人間に属するものもの生産力の總計であつて、労働手段はその一つの構成分として重要な地位を占めるものであるにかかわらず——この書物では、物質的生産力の原因をさらに求めて——つまり「原因の原因」を求めて——これを労働手段としている点等々、多くの欠陥を含んでいる。しかし、マルクスとエンゲルスの古典的著作の関連箇所を詳細に検討し、それによつて唯物史観を理解しようという努力——それは人間社會の具体的な研究ではなく古典の文献的解釈にとどまてはいるが——が貫かれており、その諸帰結を批判的に読めば、博引傍証、今日なお学ぶべきものがある。のみならず、唯物史観の基本的原則を研究しようとするからには、われわれはこのわれわれへの遺産——しかもわが国でなされた最初のまとまつた唯物史観研究の書物——を正しく継承し發展させることが必要である。つまりその内容の否定面と肯定面とを正當に検討する努力を払つておかねばならない。しかし、ここでは詳細にこの検討に立入るいとまがないので、一般的に右の点を力説したうえで、たとえば、河上が、いわゆる唯物史観の公式について、そのなかには精神的文化の經濟的説明と社會的組織の經濟的説

明との互に連絡する二個の学説が含まれており、それぞれについて静的考察と動的考察とがなされているという観点から、分析をおこなっていること、また、公式のはじめの数行について次のような図式を——テーニスやバルトやハムマツヘルやプレハーノフの見解と対置して——与えていることなど、興味ある解説が多々見出されること——もちろんこうした解説にも問題があるが——を指摘するにとどめたい。



この時期における河上の社会の変革にかんする研究は『社会組織と社会革命に関する若干の考察』（大正十一年）を生んだ。そのなかでかれは政治革命の必要を説き、これを排斥した社会組織の改造のみを説くものはマルクス主義者ではない、と断じている。

さて、『唯物史観研究』にみられる哲学的世界観の欠如は『資本主義経済学史的発展』（大正十二年）でもあらわれる。『唯物史観研究』の著者から一般読者は、この書物では経済思想についての経済的構造と階級意識とからの分析を期待するでもあろうが、そのような分析が欠けているというところに、まずこの書物の欠陥があ

る。そればかりか、この書物はラスキンの「大胆に帷を掲げよ、光に面せ」の句をもつて閉じられていることが知られるように、カーライル、ラスキンのな——神秘的ですらある——人道主義の見地で綴られている。櫛田の有名な論文「社会主義は闇に面するか光に面するか」⁽²⁶⁾によって手厳しい批判を受けたのもこうした点である。河上はこの批判によって「一本参った」と思い、「と同時に、私は奮発をなし、これから一つ出直して、是が非でもマルクス主義の真髓を把握してやろう、と決意した。そして、その時の此の決意こそは、その後遂に私をして、或る程度までマルクス主義の真の理解に到達するに至らしめた、基本の動力である」⁽²⁶⁾とかれはのちに書いている。

福本が河上の『唯物史観研究』にみられる経済史観の見地を批判したことはさきに述べた。河上らの見地にたいして福本が「唯物史観の構成過程」で真向から対置したものは「唯物史観——歴史の所謂唯物弁証法的把握——は、科学的社会主义並にその運動の核心をなすところの世界観歴史観である。それは、その根柢に於いて、唯物論である。——しかし、自然科学的乃至観照的唯物論ではない。

——弁証法的唯物論である」⁽²⁷⁾という見地であつた。——櫛田の批判によつて自分のマルクス主義理解の甘さを痛感した河上にとつて、弁証法的唯物論と唯物史観とを正面に据えての福本の——当時わが国の水準としては理論構成の上で画期的な——諸論稿のなかでの批判が、そのいつその前進のための発条となつた。

なお、時間的に若干前後するが、河上は櫛田のあの批判論文を受

けた直後でも、唯物史観のマツハ主義的な理解を試みるなど、かなりの低迷を繰り返している。それは『社会問題研究』第五五冊掲載の「唯物史観と因果関係」という論文においてである。かれは『唯物史観研究』では生産力と生産関係、土台と上部構造などの関係を因果関係として捉えていた（ここには「唯物史観の立脚点」における機械論的な因果性の把握がなお尾を引いているように思う）が、今や石原純の、自然科学において原因概念は排除さるべきである、という見解にしたがって（なぜなら社会現象を観察するには、自然科学的な態度でなければならぬから、と河上は考えて）、唯物史観からもいっさいの原因概念は排除さるべきであり、それはただ「相関関係の網をば、物質的生産力という網目のところを擱んで引上げて見せたもの」にすぎず、「それは因果関係の系列を説いたものではなく、相関関係の布置を明かにしたものである。」と結論している。⁽³⁰⁾これはマツハ主義の社会科学領域への適用であり、福本が「河上博士の右の論文は、マルクス主義の基本的特質を、ややリ、フ、イン、されたる形に於て、抹殺し去らんとするものである」として痛烈に批判したのは当然である。——このようにして河上の社会現象研究の観点は、大づかみにいえば、機械論的因果性の見地から、右の論文におけるマツハ主義的な原因性批判の見地を経て、さいごに唯物論とその弁証法とに到達したといえるであらう。⁽³²⁾

北大文学部紀要

(1) なお、前年河上は『史学雑誌』第一五篇、第八号(明治三十七年)に「セーリグマン教授の『歴史の経済的説明』」と題して、その内容を抜粋翻譯している。

(3) 河上はこの頃のかれ独自の、絶対的無我愛の体験について「この時の宗教的体験の所得こそ当時私の贏ち得た唯一最大の獲物であつて、それが私の一生の生活方針の根柢を据えてくれた」と述懐している。かれは自分を「宗教的真理の存在を承認する一個のマルクス主義者」とも規定している。しかしかれにおける科学と宗教の問題については本稿では立入るゝまいがない。「自画像」「自叙伝」一、九三頁、「大死一番」「自叙伝」五、一一頁。

(5) 以上「唯物史観の立脚点」からの引用は逐次『経済学批判』の四三〇、四七三、四七〇、四六九、四三四、四六八、四三七、四三九、四五五―六頁。なお本稿はもと「唯物観より唯心観へ」と題して『国民経済雑誌』第一三巻第一―二号（明治四五年）に掲載されたもの。

- (6) 「経済的唯物史観を論ず」は『京都法学会雑誌』第八卷第六、八、一〇、一一号（大正二年）に連載されたもので、引用は、通し頁で、九九一、一四八〇、二一四四頁。
- (7) 櫛田民蔵「河上教授の『奢侈と貧困』を讀みて」『国家学会雑誌』第三〇卷第五号（大正五年）。なお、「河上教授の示教に就いて」『河上教授「貧乏物語」を読む』が櫛田の關係論文である。同誌第三〇卷第六号、第三一卷第四号。何れも櫛田民蔵全集第一卷（一九四七年）に収められている。
- (8) 河上がこの書物ではまだ唯物史観を「経済的社会観」とみていることは言うまでもない。そして人と境遇との間の因果關係について「境遇は末で人が本である」と述べている。また、かれはロイド・ジョージに傾倒し、卷末附録でかれのためにとくに二篇を捧げている。『貧乏物語』岩波文庫版、一二四、一二二頁参照。
- (9) 櫛田民蔵全集第一卷、二七四頁。もつとも櫛田はこの引用でも知られるように、労働者階級の自覚を経済的自覚と注しており、政治的自覚としては捉えていない。現代の経済組織の「欠陥を充たし失望を和けて行く方法」として各種の組合組織の發生に期待をかけている。同上書、二七五頁。
- (10) 岩波版『貧乏物語』解題（大内兵衛）。一八七頁。
- (11) 河上肇『改版社会問題管見』（大正九年）後篇八。
- (12) 細川嘉六監修『日本社会主義文献解説』二〇一頁によれば、「後年河上が社会運動の実践に参加し、昭和四年夏新労働党の結成が提唱されるや、これを支持して、この雑誌も一時同党のために提供されたが、河上がこの党とも袂を別ち、日本共産党の地下運動に参加するにいたつて、昭和五年一〇月刊行の第一〇六号をもって本誌の長い歴史を終つた」とある。
- (13) 同上書、同頁。
- (14) 河上肇『唯物史観研究』一七三—一四頁。
- (15) 福本和夫「唯物史観の構成過程—唯物史観研究方法の批判」『唯物史観と中間派史観』（大正一五年）所収三〇頁。
- (16) この論文は同上書に収められる。福本は書く、「博士は、唯物史観から、弁証法的唯物論を抹殺して経済史観としてしまわれる。」一七七頁。
- (17) 河上肇『近世経済思想史論』一七九、二〇六、二〇九頁。
- (18) 櫛田民蔵「河上肇著『近世経済思想史論』批評」『著作評論』第一卷第四号（大正九年）。全集第一卷、二二頁。
- (19) 櫛田民蔵「マルクス学に於ける唯物史観の地位」『我等』大正九年十月号。全集第一卷、四一、三五頁。なお、かれはいわゆる唯物史観の公式を分析して、(一)一般文化の物質的基礎、(二)社会組織の弁証法的発展、(三)階級闘争の経済的基礎、(四)一般政策の前提の四要素から成るとしている。本節の註(22)を参照。
- (20) 河上肇『唯物史観研究』九二頁。
- (21) 同上書、一四六頁。
- (22) 同上書冒頭の論文におけるこの分析は註(19)で述べた櫛田の分析と結びつけて読まらるべきである。
- (23) 同上書、二八頁。『近世経済思想史論』一八九頁にはより詳しい図式が載っている。しかし、「マルクスの謂ゆる社会的意識形態について」(『経済論叢』第二卷第一号、大正一五年)では、この見解は捨てられており、以後「自己清算」等でもこの図式はとりいれられていない。
- (24) ラスキンのこの後の者にも」の最終節の句（岩波文庫一八六頁）。河上のラスキン、それからスマートへの傾倒は『社会問題管見』（大正七年）の頃以来である。
- (25) 『改造』大正一三年七月号所載。櫛田民蔵全集第一卷に収録。
- (26) 河上肇「自画像」「自叙伝」一、一五五頁。
- (27) 福本和夫「唯物史観と中間派史観」三頁。
- (28) 「マルクスは歴史の進行に関し、一の自然科学的の因果法則を発見した人である。そうして吾々は、その因果法則を名けて、マルクスの唯物史観と謂うのである。」とも河上は書いている。（『唯物史観研究』七三頁）。ここには、『唯物史観研究』に収載されているポルハルトの論文における「史的唯物論の排列する所の、因果の全系列（原因及び結果の連鎖）」（二三〇頁）という見地からの影響が著しい。
- (29) 石原純「物質現象に於ける因果則」「自然科学に於ける説明、記載および構成」『思想』大正一三年、七月、八月。
- (30) 河上肇「唯物史観と因果關係」『社会問題研究第五五冊（大正一三年）

一五頁。

(31) 福本和夫「経験批判主義の批判——河上博士の『唯物史観と因果関係』を批判す」『唯物史観と中間派史観』三二頁。

(32) 「自己清算」その八には「問題は『原因の原因』の探索にあるのではない。あらゆる現象は因果の相互作用の連絡のもとに横たわる」とある。『社会問題研究』第八五冊一七頁。

(33) 河上肇「自画像」「自叙伝」一、一八五頁。

(34) 同上書、一六六頁。

四、「自己清算」を経てマルクス主義哲学の原則的把握へ

——河上の唯物史観研究の後期——

河上は書いてある、「かくて大正一三年（前記樋田の批判のあった年……筆者）頃から『新たな旅』に立った私は、その後、昭和三年四月、大学教授の職を退く頃になって、弁証法的唯物論——唯物史観——マルクス主義経済学、この一聯の学問体系について、漸く大体の理解に達することが出来た。大学における経済原論の私の最後の講義が、敘述の順序から云っても、各章の内容から云っても、完全に『資本論』の解説となり、や々と物らしくなったと云うのも、学問の方から云えば、その頃漸く弁証法的唯物論が分かって来たからである。」——この最後の講義が『経済学大綱』（昭和三年）の上篇「資本家的社会の解剖」となっている。⁽³⁾ また『マルクス主義経済学の基礎理論』（昭和四年）では、下篇「マルクス主義経済学の出発点」（同年刊における『資本論入門第一卷上冊』のほとんどそのとおりの再録）に先立ってほぼ同数頁に近い内容をもつ上篇「マルクス主義の哲学的基礎」があり、これは唯物論、弁証法、史的唯

物論（唯物史観）の三章から構成されている。⁽³⁾ かれによれば、「マルクス主義経済学は、その哲学的基礎から離しては、これを正當に理解することが不可能」だからである。この部分から、われわれは、河上におけるマルクス主義哲学の体系をまとめた形で——しかも最後の形で——知ることができる。

昭和四年（一九二九年）といえば、最初の三木哲学批判を含む服部之総の論文「唯物弁証法と唯物史観」の発表された翌年で、『プロレタリア科学』誌上で三木哲学の決定的批判がおこなわれた前年にあたる。⁽⁵⁾ それはシロコフ、アイゼンベルグや、シロコフ、ヤンコフスキーなどのすぐれた教程の邦訳（それぞれ昭和七、一〇年）に先立つこと数年である。日本の左翼的論陣を三木旋風がなお吹きまくるさなかで、しかも専門の哲学者からの協力がまったく期待できないなかで、かれがマルクス主義哲学のこのような原理的敘述を与えたことについて、われわれはまずこれを高く評価しなければならぬ。マルクス、エンゲルスはもちろん、レーニン、プレハーノフ、デボーリンらから真剣に学びながら、ここまでかれは辿り着いたのである。——このようにして昭和七年には『資本論入門』が最終的な形で刊行されたのである。⁽⁶⁾

さて、このような成果に到達するまでのかれの悪戦苦闘の跡が「自己清算」である。これは、さきに述べたように、昭和二年二月の「その一」から始まり、三年十二月の「その十」にいたる計十冊である。⁽⁷⁾ その内容のあらましは本稿の末尾に付した「資料」によっても或る程度は知られるであらう。——本稿はこの「自己清算」を

中心にし『マルクス主義経済学の基礎理論』や『資本論入門』をも併せ考慮にいれながら、若干の重要な問題をとり出して検討することにする。福本との論争の論点の整理と検討については、残念ながらすべてこれをのちの機会にゆずるほかはない。

一、三木哲学との関係

前述した論文のなかで服部が指摘したように、「自己清算」は第三冊以前と第四冊以後とで色調を異にしている。それは、第三冊以前では「専ら三木清氏の方向に於けるマルキシズムを見る」のに対し、第四冊以降では「三木氏の理論と絶対に相容れざる基本的立論のために多くの頁が当てられている」からである。⁹⁾すなわち、第三冊までは、マルクス主義を解釈する河上の哲学的抛り処は、三木の「解釈学的現象学の基礎概念」である。この書物からの引用がしばしばなされているのはもちろん、河上自身の見解によっても、そもそも歴史観を規定するものは「関心」であり、「唯物史観は現代資本主義社会における不安の産物、いいかえれば「現代の基礎経験」にもとづく「自覚の産物」である。¹⁰⁾河上は唯物史観の哲学的基礎を実践的唯物論だとしているが、そこでいう実践とは、たとえば「吾々が最初に且つ本源的に見出すところのものは、対象ではなく、交渉的存在または実践的存在である」という言葉にも見られるように、どこまでも三木の概念である。¹¹⁾

第四冊以降ではたしかに「関心」「基礎経験」「交渉的存在」などの語は見当らなくなっており、河上の唯物論理解は原則的に深まっている。しかし、第三冊以前に展開された論議を自己批判すること

なく、しばしばそこでの帰結を再認、援用してさえている。だから服部が「博士は、その『自己清算』の全体を通じて、遂に三木哲学からの観念論的出発を清算することなく」云々と述べているのも¹²⁾とてもである。第三冊と第四冊との間には、それ以前にはまだ読んでいなかった¹³⁾『唯物論と経験批判論』がかれの手許に届いた——第四冊以降これからの引用がおこなわれる——という事実はある。とにかく、河上が、不徹底かつ折衷的ながら、三木の見解にたいし次第に批判的になっていったことはたしかである。——服部の前記論文が発表された時（昭和三年一月）には「自己清算」はすでにその第九冊を公刊し終えている。三木哲学が論陣を風靡しているなかでこのようにみずからそれからの離脱を徐々におこなっていたかれゆえに、昭和四年暮における「マルクス主義の哲学的基礎」のような原理的な論稿の発表がなされたのである。

次に、三木の影響をみとめうる河上の見解を一、二指摘しよう。

1、唯物史観の限界について。第一冊によれば「生産力と生産関係との弁証法的発展に基づく唯物史観」は現代の史観——無産階級のイデオロギー——であり、「それはそれ自身の限界を有ち、またそれ自身の限界を自覚する。」すなわち、生産力と生産関係との矛盾によって発展してきた「この人類社会の歴史が終りを告げると共に、唯物史観もまた終りを告げる。」なぜなら、ここでは両者の矛盾は揚棄され（生産力と生産関係との概念の弁証法、それはその限界が規定さるべきであり、且つそれは真実の差異を廃棄しないと¹⁴⁾ころの、一の弁証法」（河上訳）とマルクスの言うように）唯物史観

は「それ自身をアウフヘーベンするであろう」から。⁽¹⁵⁾これは、唯物史観は人類の進歩とともに適用の度合を減じてゆくという河上の以前からの思想の継承のうえに立つて、直接には三木哲学の見地を受け入れることによって主張されたものである。なぜなら、三木によれば、基礎経験の異なるに依りて、異なる人間学を介して、異なるイデオロギーが形成されるのであり、唯物史観は無産者の基礎経験にもとづくものにすぎないからである。——この見解は『マルクス主義経済学の基礎理論』でも継承されている。「生産諸力と生産諸関係とが意識的に調和されることになれば、両者の矛盾撞着によって惹き起される『自己運動』としての自然史的過程もまた止揚される。」唯物史観は、「生産力と生産関係との間における矛盾が……その跡を絶」ち、人類が必然の王国から自由の王国への飛躍をおこなうことを自ら意識しており、「その点において、現在吾々の有するが如き形態における唯物史観は、……そのままの形態では将来の歴史に妥当しえざるものとして、それ自身の限界を自覚しているものである」⁽¹⁶⁾。

2、主客の弁証法的統一について。河上にとつてのマルクス主義の哲学的基礎たる実践的唯物論が何故にまた弁証法的唯物論でもあるかを、第三冊でみると、「世界を人間の実践的活動として（人間の働きかけによつて顕わになる交渉的存在として……筆者）把握すること（実践的唯物論）は、世界を人間と自然との闘争過程として把握すること（闘争的唯物論）であり、それゆえにまた其れは、世界を対立物の闘争としての自己運動において把握するゆえんであ

る。実践的唯物論はすなわち弁証法的唯物論である」⁽¹⁷⁾。この前後では、『ドイツ、イデオロギー』の有名な「人間と自然との同一」が、三木の、「現実的なもの」「交渉存在」唯一の具体世界と解釈されて援用されている。第五冊でも、「自然と人間との対立は、かかる具体的統一からの抽象によつてのみ成り立つ」⁽¹⁸⁾とされている。すなわち、唯物弁証法は自然と人間との交互作用の弁証法であり、その基礎は唯一の具体的「交渉的存在」、しかして、自然はそのたんなる抽象面、ということになる。——こうした三木の見地は戦後も、田中吉六氏を始めとして今日まで多くの人々によつて主張されている。

二、唯物論の基本原則とその貫徹

河上は、第四冊では、エンゲルスとレーニンにしたがつて、唯物論を觀念論から区別する基本的見地を、思惟にたいする存在の第一次性の問題においている。いうまでもなく、これが唯物論の基本原則である。

ところで注意すべきは、河上が、エンゲルスの『フォイエールバッハ論』にみられる右に述べたような存在の第一次性による唯物論の規定とありのままの把握という規定とを、⁽¹⁹⁾区別している点である。かれは、後者を、われわれの意識とそれから独立に存在する外的世界との連絡物（感覚とも経験ともいわれる）としてしている。つまり、觀念論的妄想を排して、だれしにも現われるがままに外的現象を研究の出発点とするのが唯物論だといふのである。⁽²⁰⁾『マルクス主義経済学の基礎理論』によれば、前者はマルクス主義における哲学

上の根本的見地である」とし、これを原則的に確立したうえで、これは「研究にとつての唯物論的出发点」を論じ、ここから「唯物論的認識に関するエンゲルスの次の規定——前に引用したる、哲学上の二大陣営に関する、表現とは、おのずから異なる表現を有つもの——は、理解さるべきである。」として、後者を引用している。⁽²¹⁾すなわち、河上の見解のなかに、ありのままの把握についての規定は「存在の第一次性の確認の結果として出てくる命題」である、という見地を見出すことができるであろう。——今日なお、存在の第一次性を括弧にいれて（唯物論の原則の貫徹を怠つて）ありのままの把握をもつて唯物論の基本規定と代替しようとする傾向がある。⁽²³⁾しかし、これは経験主義に転化する道である。河上が、この時期にすでに、『フォイエルバッハ論』における二規定の区別に着眼し、両者を右のように把握しているのは卓見としなければならぬ。

唯物論の基本原則の貫徹について河上は次のように言っている。

存在の第一次性にもとづく「観念論と唯物論との区別は、一見して甚だ明瞭なるが如くである。」しかし、「一たび国家の問題に触れてくると、人々は此の如く忽ちにして宗教的偏見のなかに溺れ、唯物論の見地を棄てて観念論的泥沼のなかに落ち込み、そこに一種の神祕なるものを見るに至るのである。マルクス主義はあらゆる問題に対して常に徹底的に唯物論の見地に立つ。このことは、かく一般的に抽象的に要約すれば、何んでもないことのように見えるけれども、しかし、それが吾々の認識を科学的ならしめるために役立つ効果に至つては、これを如何に重く評価するとも、決して過重とはな

りえぬほどのものである。⁽²⁴⁾……この言葉は、あらゆる問題に唯物論の原則を貫徹することを回避する現在一部にみられる傾向にたいする頂門の一針であると思われる。

なお河上が唯物論と感覚主義（観念論）との区別を次のように明確に述べていることも注目すべきである、「同じく感覚から出発しても、その感覚の源泉としての客観的実在を認むるか否かによつて、唯物論と観念論との対立的傾向がそこから生まれ来るのである。すなわち、吾々がもし外物を以て、吾々の感覚の外に、それから独立して、存在しているものとなし、従つて感覚の源泉は吾々の外界に存在する外物からの刺激にあるとなせば、吾々は唯物論者であるが、これと異り、同じく感覚から出発しても、その感覚以外に、これが源泉としての客観的存在を認めず、逆に外物を吾々の感覚に依存するものとなせば、吾々は唯物論を顛倒したる観念論者となるのである。」⁽²⁵⁾

三、マルクスによるフォイエルバッハの継承

河上は書く、「マルクスをしてヘーゲルの弁証法を顛倒せしめ得たるその唯物論的見解は、——『思惟（Denken）の存在（Sein）に対する、精神の自然に対する関係の問題、全哲学のこの最高問題』に関する彼れの根本的見解は、——彼がフォイエルバッハから之をそのままに承継したものである。しかし彼自身は、……この問題について余り語らなかつた。彼がフォイエルバッハについて論じたところは、フォイエルバッハを深化する必要がある方面に限られており、フォイエルバッハの見解のうちそのまま採り容れらるべき方面

については、彼は別にこれを論ずる必要を感じなかったのである⁽²⁶⁾」すなわち、かれの指摘しているように、マルクスに深い感化を及ぼした『哲学改革のための予備的提言』のなかでフョイエルバッハは『思维の存在に対する真の關係は、存在が主語であり、思维が述語であるということである。思维は存在からであるが、存在は思维からではない。存在はそれ自身から、それ自身によってである。……存在はその根拠をそれ自身のうちにもつ⁽²⁷⁾。』と書いたが、この命題についてプレハーノフは言う、⁽²⁸⁾「思维が存在を規定するのではなくて、存在が思维を規定するのであるとの思想は、フョイエルバッハの一切の哲学的根本思想の根底に存しているのであつて、同一思想はマルクスによって唯物史観の基礎に据えられた⁽²⁹⁾」。

河上は、プレハーノフやレーニンに学んで、マルクスにおけるフョイエルバッハの哲学的意義を正しく捉んだ。マルクスは、かれがフョイエルバッハから承継した唯物論的基礎については、繰り返して論じる必要を感じなかった、という河上の指摘は重要である。なぜなら、それは、なぜマルクスの初期の著作のなかに、存在の第一次性、意識の基底^{ベース}としての自然という問題がとくに主題として論じられていないか、を説明しているからである。このことを忘れるとき、マルクスにおける初期の思想の発展と唯物史観の成立についてのさまざまな誤った解釈——たとえば主体性論——が発生するのである。別言すれば、フョイエルバッハの唯物論を理解することなしに初期マルクスの著作の解釈を試みることは、——唯物論の理論を正しくおし進めるといううえで——実り乏しいものであるというこ

とである。

四、研究の端緒^{エンツゲ}——付、抽象的なものから具体的なものへ、歴史的なものとの論理的なもの

さきに述べたように、河上によれば、唯物論的研究の出発点は外的現象である。外的現象というのは、思维の産物ではなく、われわれの思维から独立に存在する物（客観的实在）としてわれわれの前に前提されているものである。つまり、何らの論証を必要としない自明な事実が出発点でなくてはならない。——それでは『資本論』の出発点は何か。その冒頭によれば、資本家の社会の富は、どれくらい商品集大成として、個々の商品はその原基形態（細胞形態）として、現象する（*erscheinen als*）がゆえに、研究は商品の分析から始まることになる。

ところで、かれによれば、資本家の社会の富という具体的なものはこのように表象の対象ではありえても、いまだ思维によって總体的に把握されてはいない。それが總体的に把握されるのは、その細胞形態としての最も抽象的な規定たる商品から出発し、次第に具体的なものに上向して、それをわれわれが精神的に再生産することによってである。そのためにわれわれは、最も単純な範疇（商品）を、この具体的なものの一面として外的現象のうちに見出すのである。その意味で河上は、いわゆる冒頭商品を資本家の社会の商品——だが、それから「資本家的」という規定を捨象されたかぎりで単純商品——であると主張するのである。

そして河上は書く、『資本論』の冒頭において先ず分析されてい

る商品は、資本家的諸社会の富の原基形態としての商品であり、それゆえにそれは、……資本家的諸社会の富……を離れては……存在しえざるものである。この場合、個々の商品は、……『一個のおそろしく龐大な商品の集大成』として現われている資本家的諸社会全体の富と、結びつき、みずからそれに媒介することによってのみ、かかる資本家的諸社会の富の原基形態たる普遍性を具えている。

……それは、形式論理の抽象的普遍性に対立するものとしての、具象的普遍性を具えている。』この意味で「始点は終点に依存している。」「いいかえれば「論証の主張点は論証の到達点に依存している。」それゆえ、ここは、始点↓終点、終点↓始点という円環性が存するのであり、「思惟による Vorwärtsschreiten (前進) は、ヘーゲルのいう如く、ある意味において、Rückwärtsschreiten (復帰) である。」と河上は述べている。⁽²⁹⁾

序でにいえば、マルクスの『経済学敍説』にあるように、この商品から出発して次第に具体的なものに進み、ついに最も具体的な資本家的社会の富を總体的に把握するにいたる道がいわゆる上方への旅である。ところで、河上によれば、マルクスが書くように、これが科学的に正しい方法であり、「福本氏が發明された『下向⇨上向運動』(福本はこれをマルクスの弁証法的方法とする……筆者)というが如き、科学的に正しからざる方法と正しき方法との混血児は、単なる氏の幻想として存するにすぎない。」⁽³⁰⁾このように、河上は、下向⇨上向論を全然否定し去っているのである。だが、下向⇨上向論がはたして「混血児」にすぎないのか。いやむしろ、当時すでに服

部が書いたように、それは「何等觀念論的なものを含んでおらず、反対に唯物論的である」⁽³¹⁾とさえ言えるのではないか。われわれは、認識の弁証法を鍛えるために、端緒論^{エントラング}もからむこの下向⇨上向論についての福本―河上論争をふりかえり、これを正しく評価する必要がある。

さて、抽象的なものから具体的なものへの論理的な進展は歴史的な発展を反映する。たとえば、商品、貨幣、資本という発展は、歴史的なものとして、資本家的社会の成立の過程において人類が辿ったものである。しかし、抽象的なものから具体的なものへの道は、具体的なものをわれわれがわがものとするための思惟の様式であり、抽象的な範疇としての商品も資本家的社会の一面としてのみ存在するものであり、それ自身として資本家的社会の成立以前に独立的に存在していたものではない。河上はそして思惟の進行と史的発展との適応を、個体発生と系統発生との関係によって説明している。

「自己清算」で展開されたこうした理論は『資本論入門』の第一巻第一篇第一章「商品」の第一「資本の前提としての商品」の主たる内容をなしており、この全著作を貫ぬく基本的な観点となっている。

五、弁証法

前項で、付言として弁証法的内容の一端に言及したが、あらためて弁証法について述べよう。

前述のように、「自己清算」では、弁証法的唯物論は、主体と客

体との交渉というところから導かれており、自己運動や対立物の統一について語られていても、弁証法についてのまとまった探究はなされていない。これに反し、『マルクス主義経済学の基礎理論』では、その第二章でこの主題が体系的に詳述されている。

河上はそこです、弁証法を「事物を唯物論的に把握することのために、そして斯く把握される事物それ自身が弁証法的であるために、成り立つ法則である」として、唯物論との統一において弁証法を捉えることを力説している。

さて、かれによれば、弁証法の本質は、事物に対する全面的観察または対立物の同一性の認識にある。そして、ここからまず、一切の事物の差別の相対性（自然、社会および思维——思维の場合には真理と誤謬として——において）の認識が、次には、事物の発展過程における（運動の流れにおける）把握ということが引き出される。ついで、この事物の発展の法則として、反対物への転化、対立物の闘争（発展の原動力としての矛盾）、量から質への転化、否定の否定が詳しく検討されている。全体にわたって、古典書をより所として論じられており、そこにとくに独創的な主張がなされているわけではない。しかし、弁証法の諸問題が、すでにこの時期に、一経済学者によって、右のような体系的な形式で敘述されていることは、注目すべきである。

六、生産力

河上は生産力には二様の意味があるとしている。第一の意味では、使用価値（財、富）の生産に役立つ力のことであり、社会に帰

属するものもものこうした生産力の総計を指す場合には、古典書では複数形が用いられている。第二の意味では、労働の生産力といわれる場合で、すなわち生産性のことである。前者が絶対的の大きさを示すにたいし後者は相対的の大きさ（比率）を示す。「絶対数としての生産諸力が歴史の根本動力であり、相対数としての労働の生産力にかかる根本動力の変動を示すための指数として役立つにすぎない。」⁽³⁴⁾

前者のうちには「人間の利用のために動員されたるあらゆる種類の生産力が含まれ」、「苟くも『人間による自然の加工』に役立つ力となるものは、みな斯かる生産諸力の総計の一構成成分」となる⁽³⁵⁾として、河上は次のような図表を与えている。

一、人間によって占有された自然力（水力、風力、等々）

二、人間そのもの
(a) 自然力としての人間
(b) 社会力としての人間

(1) 労働の社会的組織、等々
(2) 社会的強力、革命的階級、等々

三、人間の生産物
(a) 物質的生産物（生産手段）
(b) 精神的生産物（科学）

生産諸力は、生産諸関係とともに、人間の生の社会的生産という自己運動する統一物の対立的側面をなす。⁽³⁷⁾両者の弁証法的統一について、河上は「生産関係はそれが一つの生産力であるかぎり、他の生産諸力と同一であり、共に社会の生産力に統一されている。だがこの統一が分裂するとき、生産力たる生産関係はその反対物たる破壊力に転形し、対立的として他の生産諸力に対抗する。」しかし、新たな生産関係の成立によって、それは「再び一の生産力に転形し、

爾余の生産諸力と連絡調和を保ち、生産関係と生産力との統一が恢復されるのである。」と述べている。⁽³⁵⁾ すなわち、両者の関係は、同一↓分裂↓同一の恢復となる、また、生産力と同一または分裂するところの生産関係についていえば、生産力↓破壊力↓新たな生産力ということになる。

七、社会の経済的構造Ⅱ土台

周知のように、生産諸関係の総和が経済的構造としていわゆる土台をなすのであるが、河上によれば、階級社会にあつては、それは純経済的な諸関係と政治経済的な諸関係とから構成される。あるいはむしろ、現実的には、階級社会のすべての生産諸関係は政治経済的な諸関係であり、純経済的諸関係はそれから政治的権力の作用を捨象したものにすぎぬ、とされる。(マルクスの『経済学批判』の予定されていた篇別、資本、土地所有、賃労働、国家、外国商業、世界市場についていえば、始めの三つが純経済過程、あとの三つが政治経済過程である、と河上は言う。) というのは、資本家的社会の成立過程も発展過程も、現実には、強力少なからざる保護を受けるものであり、没落過程もまた強力をその助産婦とするからである。かれによれば、マルクスが『経済学批判序説』で、たとえば国家をその対象のなかにいれているのはそのためである。すなわち、この場合の国家は、上部構造としての国家ではなく、社会の土台としての経済的構造の一部を形成するもの、つまり、現実的な生産諸関係の本質を構成する一契機として機能するかぎりの国家である。

八、土台と上部構造

いわゆる唯物史観の公式中の「これらの生産諸関係の総体は、社会の経済的構造を、すなわち、そのうえに一つの法律のおよび政治的な上部構造がそびえたち、そしてそれに一定の社会的意識諸形態が照応する現実的な土台を形成する」の一句について「自己清算」では、「経済的構造の必然的な直接の副産物」として、その一、法律のおよび政治的上層建築、その二、社会的意識諸形態を論じている。ということとは、それとは別に直接的でない副産物があるということである。かれによれば「物質的生活の生産様式は、社会的、政治的、精神的な生活過程一般を制約する」というマルクスの句がこれを説明する。つまり、物質的な社会生活過程とその頭脳への直接の反映である社会的意識形態を除いて、社会的、政治的、精神的な生活過程一般は、直接的にはないが、結局のところ、物質的な生活の生産様式に制約される、というわけである。

しかし、河上は『マルクス主義経済学の基礎理論』ではこの煩雑な見解を棄てており、社会を構成する諸要素のうち経済的構造が土台であり、政治的上部構造と観念的上部構造がそのうえに立つという周知の見解をとるにいたっている。

九、社会的存在と社会的意識

河上を書く、「意識は一般に存在を反映するということ、これが全唯物論の一般的テーゼであるが、今吾々がこの見解をただ自然界にのみ局限することなく、徹底的にこれを社会の上に押しひろげるとき、吾々はそこに、社会的意識は社会的存在の反映である、という史的唯物論(唯物史観)の根本的テーゼを得ることになり、かくて始

めて、エンゲルスの言う如く、『観念論は、その最後の逃げ場たる史観から追い出され、唯物史観が提供され、そしてこれまでのように人間の存在を彼等の意識からでなしに、彼等の意識を彼等の存在から説明する道が発見されたのである。』⁴²

それでは社会的存在とは何を指すか。

『マルクス主義経済学の基礎理論』で河上は書く、⁴³「社会が階級に分裂していなければ、吾々の社会的存在は吾々の住む社会の経済的構造で尽きるのであるが、もし社会が階級に分裂しているならば、社会の経済的構造とそれから派生するところの政治的構造とが吾々の社会的存在を構成することとなる。」すなわち、社会的意識は社会的存在の反映であるというテーゼにおいて、社会的存在は土台と政治的及び法律的上部構造（いわば上層建築その一）とを含むものであり、したがって、観念的上部構造（上層建築その二）はこれら両者を反映するものとされている。——ソヴェトの『哲学の諸問題』誌でも、最近、社会的存在の概念のうちに社会の物質的生活ばかりでなく政治的諸形態をも含めるという見解が出されているが、この見解を検討するさいにも、われわれとしては、海外の論議ばかりでなく、河上の主張を吟味する必要があることを指摘したい。

× × ×

以上は、河上の唯物史観研究のいわば後期の著作から若干の重要な問題を選び出したにすぎない。なお多くの問題が論じ残されているのはいうまでもない。

河上の把握したマルクス主義哲学にはいくたの批判点が見出され

うるにせよ、それをこのように原理的な体系的な形式で——しかも当時の水準において——捉ええたことは、十分に評価しなければならぬ。しかも、かれが、たんに哲学的一般論を精緻に究明するばかりでなく、これを経済学——『資本論』——の理解に適用していること、いやむしろ、^{ボリタイカル・エコノミー}経済学を研究するなかでその哲学的基礎の究明をおこなったこと、そればかりではなく、マルクスの全理論をついに革命の見地から——労働者階級とその前衛たる党の立場から——把握するにいたっていることを、忘れてはならない。

かれの『資本論入門』についていうならば、これを他の多くの解説者よりもぬきんでたものとしているところのものは、第一に、『資本論』を革命のための展望の書物として理解していること、第二にマルクス主義哲学の基礎的見地から『資本論』の内容を深く分析していることである。（これはたとえば今日流行しているいわゆる宇宙理論との基本的相違点である。）

さらに一つ、本稿を結ぶにあたって述べたいことは、かれがとくに『社会問題研究』創刊以後において、土方成美、高田保馬、小泉信三らにたいしておこなったイデオロギー闘争の意義である。（その成果は『資本論入門』のなかにも要約されており、この書物を光彩あらしめる観点の一つとなっている。）河上のこの側面での戦闘性については、別の機会に稿をあらためて論じたいと思う。

注

（1）河上肇「自画像」「自叙伝」一、一七二頁。

（2）この書物の下篇は『資本主義経済等の史的発展』に多少の加筆を施されたものである。

- (3) この部分は『マルクス主義の哲学的基礎』と題して昭和二十四年に復刻されている。
 - (4) 河上肇『マルクス主義経済学の基礎理論』改造社版経済学全集第八巻、序、一頁。
 - (5) この点については、拙稿「唯物史観と人間学」『唯物論研究』第五号を参照。
 - (6) 昭和七年一月五日付けの『資本論入門』がかれの最終的な形での書物である。しかしこの書物は発売と同時に頒布を禁止された。「昭和三年に大学を退いた後、昭和七年になって、私は、ずっと以前から着手していた『資本論入門』を原著第一巻の全部に亘って完成し、これを改造社から公刊することが出来た。……そしてそれは、遂に私の生前における最後の著作となった。……ただ最後に仕上げた此の『資本論入門』こそは、いくらか長き寿命を保って、暫くは世用を成しうるであろうと、自信していたのに、私の著書のうちでは、卻て此の書のみが最も短命なものとなりました。」河上肇「自画像」『自叙伝』一、一四七頁。
 - (7) 『社会問題研究』の第七七冊から第八八冊まで。ただその間第八四、八六冊は「自己清算」を載せていない。
 - (8) 服部之総（ペンネーム、佐伯峻平）「唯物弁証法と唯物史観」上、『マルクス主義講座』第一巻（昭和三年）二二四頁。
 - (9) 『思想』昭和二年一月号に掲載され、のち『社会科学の予備概念』に収められた。拙稿「唯物史観と人間学」『唯物論研究』第五号、三九頁以下を参照。
 - (10) 「自己清算、その一」『前掲書』第七七冊、六、一二、一七、二二などの諸頁を参照。
 - (11) 「自己清算、その三」同上書第七九冊、一三頁。河上も引用する（二二頁）とおり、三木はこう言う、「我々のいう存在は、対象（Gegenstand）ではなく、最初にそして原始的には、交渉的存在（pragmatisches Sein）である。」「現象学的解釈学の基礎概念」『思想』前掲号、二三頁。
 - (12) 服部之総、前掲論文、前掲書、二三〇頁。
 - (13) このことは、「その三」で河上が「私はまだレーニンの原著について彼
- れの見解を知ることができない」と書いていることから明らかである。前掲書、第七九冊、二四頁。
- (14) マルクス『経済学批判序説』A、四、マル・エン選集補巻3、二八九頁の箇所、ドイツ版では、二六七頁。eine Dialektik, deren Grenzen zu bestimmen und die realen Unterschiede nicht anfieht. における Grenzen を少くも河上は誤解していると思う。それは唯物史観の限界といういみではない。この一文の解釈については、ミイチン、ラズウモフスキー監修『史的唯物論』広島定吉、直井武夫訳、昭和十一年、一八〇頁参照。
 - (15) 「自己清算、その一」前掲書七七冊、一六、一八頁。
 - (16) 河上肇『マルクス主義経済学の基礎理論』二七二、二七五―六頁。
 - (17) 「自己清算、その三」前掲書第七九冊、三三頁。
 - (18) 「自己清算、その五」前掲書第八一冊、二頁。
 - (19) エンゲルス『フォイエルバッハ論』マル・エン選集第一五巻、四四六―七頁および四八一頁。
 - (20) 「自己清算、その四」
 - (21) 河上肇『マルクス主義経済学の基礎理論』五七、七〇、七五頁。
 - (22) 森信成『史的唯物論の根本問題』一九五八年、二九八頁。なお同書二二〇頁を参照。
 - (23) 戦前の加藤正がその典型である。しかし、この混乱はかなり一般的な現象である。
 - (24) 河上肇『マルクス主義経済学の基礎理論』一五―六頁。
 - (25) 「自己清算、その四」前掲書、二七頁。
 - (26) 同上論文、同中書、一二頁。
 - (27) フォイエルバッハ『哲学改革のための予備的提言』、『将来の哲学の根本問題』植村晋六訳、岩波文庫、所収、二八頁。Sämtliche Werke, neu herausgegeben von W. Bolin und F. Jodl, 2 Bd, 1904, S. 239.
 - (28) プレハール『マルクス主義の根本問題』恒藤恭訳、三七頁。なお、一二三頁を参照。
 - (29) 河上肇『マルクス主義経済学の基礎理論』三五―九頁。
 - (30) 「自己清算、その七」第八三冊、二三頁。

(31) 服部之総、前掲論文、前掲書、二五四頁。かれはさらに、この論文の下で、『マルクス主義講座』第二巻、一九三頁『経済学序説』中間題の一章は、経済学の研究方法ではなくて叙述の方法を述べたものとする。この点で、かれは、河上にも福本にも批判的である。

(32) 河上肇『マルクス主義経済学の基礎理論』一一頁。

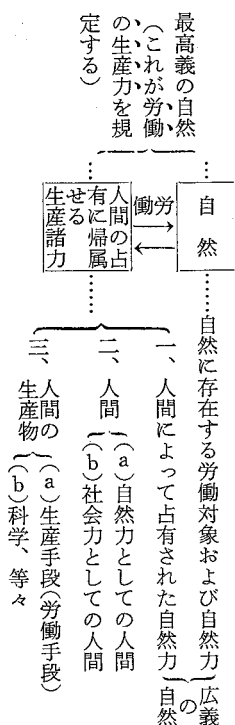
(33) 「私はそれを簡単に『差別の相対性』に関する法則と名づける。」と河上は言っている。同上書、一四四頁。

(34) 「自己清算、その八」前掲書第八五冊、九頁。

(35) 同上論文、同上書、七―八頁。

(36) この図表は『資本論入門』によった。青木文庫版、第一分冊、三五頁。

(これは註(6)で述べた改造社版の複製である。――生産諸力の構成成分についての図表は最初「自己清算、その八」の一〇頁で与えられているが、河上は「その一〇」で部分的に訂正し(構成成分の中の自然は「人間」によって占有された自然力に限らるべきであるとする)、生産諸力の自然に対する関係ならびに生産諸力の構成要素を示す図表を書いている、それは、わたくしが本註のあとで示す図表に近い。)(その一〇九頁)、『マルクス主義経済学の基礎理論』二〇六頁では、わたくしが本文であげた『資本論入門』からの図表とはほとんど同じである。ただ、「自然力としての人間」のところに括弧をつけて、「労働者の数、その体質、等々」と付言しており、また「社会力としての人間」の(ロ)に、「社会的強力」が入っていない点異なる。そして、同書二二七頁では、自然、人間、生産諸力、生産諸関係、労働の生産力などの関係について包括的な次の図表を与えている。



(37) 河上によれば、生産諸力と生産諸関係は、生産という統一物に含まれている対立物である。生産様式は、生産的活動の行なわれる仕方つまり、生産諸力が人間によって活用される様式である。そして、(一)生産諸力の変化↓(二)生産様式の変化↓(三)生産諸関係の変化という一連の連鎖がある。生産諸力と生産諸関係との統一は生産であって、生産様式とはされていない。

(38) 「自己清算、その八」前掲書第八五冊、二四、二六頁。

(39) 「自己清算、その九」同上書第八七冊、二三頁。

(40) 河上肇『マルクス主義経済学の基礎理論』二五六頁。

(41) 同上書、二五五―五六頁。

(42) 河上は大正一五年の論文「マルクスの謂ゆる社会的意識形態について」のなかで「最も広く行わるる見解によれば、社会の現実的構造といえる現実の『土台』の上に、先ず法律のおよび政治的の『上層建築』が立てられ、更にその上に、言わば第三階として社会的意識形態が立てられている、と解釈されているようである。」「(『経済論叢』第二巻第一号、一三四頁)と書き(福本もその見解をとっているとして)、これに反対している。しかし、『マルクス主義経済学の基礎理論』では、ここで述べたように、右の見解に賛同しているようにみえる。なお、この見解と、スターリンの有名な定式「上部構造とは、社会的政治的・法律的・宗教的・芸術的・哲学的な見解と、これに照応した政治的・法律的その他の機関である。」「(『言語学におけるマルクス主義について』、国民文庫版『弁証法的唯物論と史的唯物論』所収、一四二頁。……傍点筆者)とは異なっていることに注意。(43) その成果の一部は『マルクス主義批判者の批判』昭和四年にまとめられている。

(資料)

河上の「自己清算」は、本文で述べたように、かれにとって唯物史観(唯物弁証法)の把握のための哲学的努力の跡を示すものとして重要であるので、次に各冊ごとの標題を掲げ、全貌を目的的に通観できるようにした。

第七七冊(昭和二年二月)

唯物史観に関する自己清算——従来発表せし見解の誤謬を正し、かねて福本和夫氏の批判に答う〔その一〕

1 理論の実践的根源

第七八冊(昭和二年三月)

唯物史観に関する自己清算〔その二〕

2 理論の実践的根源(補遺)

3 理論の実践的基準

4 実践の理論的根拠

第七九冊(昭和二年四月)

唯物史観に関する自己清算〔その三〕

5 マルキシズムの哲学的根源

6 フォイエルバッハの唯物論

7 弁証法的唯物論(その一)

第八〇冊(昭和二年六月)

唯物史観に関する自己清算〔その四〕

8 弁証法的唯物論(その二)——ヘーゲルとマルクス

9 同上(その三)——意識と存在(再びフォイエルバッハの唯物論について)

10 同上(その四)——観念論と唯物論

11 福本和夫氏の『唯物弁証法』——唯物論を缺ける『唯物弁証法』

第八一冊(昭和二年七月)

唯物史観に関する自己清算〔その五〕

12 人間(主体)と自然(客体)との統一——ついたり、福本和夫氏の主客統一論について

13 マルキシズムにおける唯物史観と経済理論との内的連絡
唯物史観と経済理論との混同——その著しき例として

第八二冊(昭和二年八月)

唯物史観に関する自己清算〔その六〕

15 出発点としての「生の生産」——これが三契機としての生活資料の生産、人口の増加および欲望の増進

16 人間の歴史の対立的根本契機としての「生産力」、「生産関係」および「意識」

17 方法としての唯物史観

18 福本和夫氏の非唯物論的出发点

第八三冊(昭和二年八月)

唯物史観に関する自己清算〔その七〕

19 資本論の現実的出发点としての外的現象

20 福本氏の「下向—上向運動」なる幻想の由来

21 研究の出发点としての最も抽象的な範疇の現実性

22 端緒に関する福本説の決算

第八五冊(昭和三年六月)

唯物史観に関する自己清算〔その八〕

23 歴史の根本動力としての社会の生産諸力とその指数としての労働の生産力

24 社会の生産諸力の構成分——その発展の測度器としての労働手段

25 生産諸力と生産諸関係との弁証法的関係

26 人間の意志から独立せる生産諸関係

第八七冊（昭和三年一〇月）

唯物史観に関する自己清算〔その九〕

- 27 生産諸関係の総和たる「社会の経済的構造」の分析
- 28 「社会の経済的構造」に伴う必然的な副産物
——その一、「法律のおよび政治的の上層建築」
- 29 「社会の経済的構造」に伴う必然的な副産物
——その二、「一定の社会的意識形態」
- 30 土台と政治的上層建築と社会的意識との統一
- 31 社会全体の物質的土台への連絡

第八八冊（昭和三年二月）

唯物史観に関する自己清算〔その一〇〕

- 32 生産の仕方（生産様式）と生産諸関係
- 33 社会の経済的構造と純経済的諸関係
- 34 社会の経済的構造と政治経済的諸関係

（一九六二年一月脱稿）

付記

本稿は、筆者による日本のマルクス主義哲学の発展史研究の一部をなすもので、『福本主義』の哲学について」（『唯物論』一九五八年、六月）、「唯物史観と人間学——三木哲学について——」（『唯物論研究』第五号、一九六一年）の続稿である。